

大学入試のあり方に関する 検討会議(第9回)資料

令和2年6月16日(火)

兵庫県立姫路西高等学校

主幹教諭(英語)藪内章彦

1 紹介

- 勤務校: 兵庫県立姫路西高等学校 (142年目の伝統校)

<https://www.hyogo-c.ed.jp/~himenisi-hs/>

- SGH(H26～30)

「リベラル・アーツプロジェクト

～世界に飛翔するグローバル・リーダーの育成～」

https://www2.hyogo-c.ed.jp/weblog2/himenisi-hs/?page_id=7800

- SSH(R2～)

「高度な「知」を有するグローバルサイエンティストの育成

～AI時代を切り拓く～」

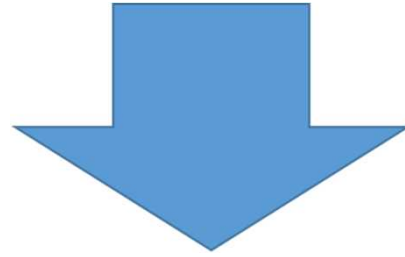
https://www2.hyogo-c.ed.jp/weblog2/himenisi-hs/?page_id=10485

略歴

- 教職歴：30年目 兵庫県立姫路西高等学校勤務13年目
- 英語教育モットー：「英語で討論ができる生徒の育成」
- MA TESL/TEFL(米国セントマイケルズ大学) <https://www.smcvt.edu>
- 英語教育との主な関わり：
 - 兵庫県高等学校教育研究会英語部会本部役員 <http://koeiken.net/>
 - 兵庫県英語リスニングテスト問作委員
 - 兵庫県高校生英語スピーチコンテスト運営委員
 - 兵庫県高校生英語ディベートコンテスト運営委員
 - 文部科学省英語教育指導者講座派遣
 - 文部科学省アメリカ研修(ワシントン大)派遣
 - SGH姫路西高校主担当(平成26年度～30年度)
 - SGHアメリカ研修(ハーバード大・マサチューセッツ工科大)プログラム開発・実施
 - SGH課題研究発表会を英語で実施
 - SGH日豪台3国高校生トラベルプランコンテスト(オンライン)開発・実施

2 世界の中での日本人の英語力

- エピソード1：某国公立難関大学大学院の学生の実情
（3無：英語力、ICT活用力、プレゼン力）
- エピソード2：某国公立難関大学ビジネススクールでの一幕
- 世界大学ランキング、海外大学への留学生の数の減少、世界情勢の中の日本のおかれた立場



**急務! : 日本と世界の平和のために、
地球市民として、日本を背負って立つ
ハイブリッドなグローバル人材の育成**

* ハイブリッドなグローバル人材:「グローバル視点」と「日本視点」を持つ日本人

- 「大学入学後からでは遅い」(前出教授談)
 - (高校の)英語授業の改革の必要性
- 文部科学省: 「小学校英語教科化」、「学習指導要領の改編」、「英語の授業は英語で」、「思考力、判断力、表現力」
「アクティブラーニング・探究活動」、「高大接続改革」 →
入試改革(英語4技能 + 記述式)の導入 → 新テスト(英語外部試験 + 国語・数学記述式)
 - ↳ クリアすべき問題が多い(当委員会・現場の声)

3 日本の英語教育の問題点（現場教師の視点から）

(1) 大学入試の弊害

大学入試があるから、コミュニケーション活動までは手が回らない。リスニング、スピーキングより読解、文法、英作指導がメイン。

→ 覚えることに重点、英語を活用することが軽視されてきた。

これまでの当検討会議の議論で「入試で高校教育を変えるのは本末転倒」「入試改革で大学の教育を変える、大学入試で高校の教育を変えることは手段と目的の取違い」

→ 確かにその考え方は理想的だが、現場の実情は、「入試が〇〇だから授業内容を〇〇する」

(2) 教員の研修機会の不足

「教員の指導方法・理念が教育の中身を変える」のに研修機会が限定されている。一度現場に出ると求めない限り研修機会がなかなか得られない。

授業改善の取り組みは個人に任されている。悉皆研修は広く浅くになっている。(県教委主催の研修があるが、全ての教員に行きわたらない。)教育研究会英語部会や個人参加の研修会が一翼を担っているのが現状。

* (教員研修の不足が、英語教育改革が進行しない一因であると考えますが、今回のテーマから外れるので触れない)

(3) 英語で議論できないのは何故？

(a) 議論(対話)のプロセス経験不足

日本の学校では日本語、英語を問わず議論をする機会が圧倒的に少ない。

授業で議論をさせないのは受験に不要、非効率？

(アクティブラーニング、探究活動の導入で変わりつつあるが)

(b) ネタと場がないと話せるようにはならない

インプット → ネタ作り(テーマ設定、データ分析、考察、議論、論文作成、発表準備) → アウトプット(プレゼン、スピーチ、質疑応答など) → このプロセスが重要！

(c) 授業の中での工夫 ～(a)(b)を克服するために(現場教員の奮闘)～
英語で授業、英問英答、単元ごとのインタビューテスト、英語プレゼン、英語ディベート、課外活動で英語による議論・対話、英語関連コンテストへの積極的な参加、海外研修旅行、国内英語合宿(EFLの環境下でも英語で議論、意見を述べる機会の創出) 多くの学校で学習指導要領に基づく言語活動の工夫が見られる

(4) 英語力アセスメントの必要性

(a) インタビューテスト、定期考査、模試(3技能→4技能の取組過程)

(b) 外部試験(GTEC、英検、TOEIC、TOEFL、TEAP)

- ・4技能のテストが可能。
- ・項目反応理論、採点の効率・正確さ、IBTで受験可能
- ・内容について、GTECや英検は高校生にとって身近な内容だが、TOEIC、TOEFL, TEAPは社会人・大学生向けで、留学先の大学、文化等をテーマにしているので高校生にはわかりにくい場面設定や背景がある。
- ・高校生には高額。
- ・遠隔地の生徒は受験機会に限界がある。

外部テストは共通テストへの代用には不適だが、英語力アセスメントとしては大変有効。

4 提言

(1) 共通テスト(英語)を大学入試センターが作成

- センターテスト(共通テスト)は高い信頼性、公平性、実施運営、採点システム等、高い制度設計がなされており、生徒、教員、大学からの信頼は絶大。大学入試センターのこれまでの功績は大。 → 共通テストの活用については、英語も他教科同様、現行通り、国公立の一次試験、私学のセンター利用という位置づけで継続実施すべき。英語外部テスト導入は中止！
- 55万人の受験生が、高大接続改革、小学校英語導入、アクティブラーニング(探究活動)等の流れの中で、英語でのプレゼン・ディベート・スピーチ・英語インタビューテスト等、授業内外で4技能の言語活動に取り組んでいる → 共通テストで4技能をテストすべき。これは、日本の英語教育の大きな変革でもある → ただし、制度設計、採点システムの構築、デバイスの技術の向上等、時間をかけて実現(5年～10年)すべき。(実施2年前には周知徹底。)

(2) 共通テストにおける英語4技能テスト導入案

- 4技能テストについては5年後(現中2生受験時)の導入を目標に準備を進める。それまでは、共通テストを大学入試センターが作成・実施。その間、4技能テストの導入体制を時間をかけて整える。
- 4技能テストには、簡易なタブレットを55万台準備。リスニングで現行使用のICプレーヤーをタブレットに変更、タブレットでリスニングとスピーキングの両方を実施。スピーキングの採点については、録音済みのタブレットを回収し、AIによる採点で公平性、公正性を担保する。
- システムが構築されてからのみ、初めて4技能テスト導入に踏み切る。
- 問題作成・実施については入試センターが担い、タブレット本体開発・プログラミング・採点システム開発・保守点検については外部委託で行う。

* 将来的には、データを蓄積し、項目反応理論による問題作成を目指す →
1年で複数回受験可に持っていきたい。すべてマーク方式 + 英語のみタブレット録音による4技能測定 (また、これにより、全高校生(1~3年)の英語力測定が安価で公正に可能となる → 全国共通の英語力測定アセスメント)

項目反応理論 (TOEIC, TOEFL, GTEC, PISA等で活用されている理論)

- 1 いつ、どこで、どの問題を解いたとしても、統一した基準でその成績の解釈を行うことが可能。
- 2 測定精度をきめ細かく確認が可能。
- 3 平均点をテスト実施前に制御が可能。
- 4 テスト得点の対応表の作成が可能。
- 5 受験者ごとに最適な問題を瞬時に選び、その場で出題が可能。

(3) 個別試験、推薦、AOについては現行通りで実施

大学入試改革からハイブリッドなグローバル人材の育成へ

- 大学入試センターが共通テスト(英語)も作成・実施
- 外部テストの共通テスト代用は中止
- 大学入試センターが4技能テストを作成、共通テストに導入
- 4技能テストは簡易版タブレットの開発～リスニングとスピーキングを1台で実施、採点はAIで実施
- 大学入試全体像は概ね現行(共通テスト)通り受験生の不安を極力解消